

2022年12月11日主日礼拝 アドベントⅢ

説教題「野原に賛美は響く」ルカによる福音書 2 章 15～20 節

主任牧師 加藤 誠

**「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」(ルカ2章20節)。**

あけぼの幼稚園のページェントの季節になりました。自由遊びの時も、お帰りの前の時間も、幼稚園の園庭で、廊下で、玄関で、子どもたちがページェントの賛美歌をうれしそうに歌っています。心から素直に神さまを賛美している姿に、自分もこんなふうにはクリスマスを迎える賛美を歌う者とされたい…と教えられます。

ページェントの練習が始まった11月半ばのこと。いつも元気な年長のA君が肩を落としてしょげている姿を見て、補佐の先生が「どうしたの?」と尋ねました。どうやらページェントでやりたいと思っていた役になれなかったようです。すると先生はこんなふうにはA君に話しかけました。「ずっとやりたかった役になれなかったら、悔しいし悲しいよね。でもね、きっと神さまはA君にぜひやってほしいと思っている役があるんだと思うよ。人間はなりたいたいものになれないと悔しくて悲しいけれど、そういう時に神さまは人間として成長させてくださるんだよ。お誕生日会の時、小さなお友だちがみんなA君のような年長さんになりたいって言うように、今もステキなA君を、神さまはもっともっとステキに成長させてくださるんだよ。劇の役はページェントが終わったら終わり。でもA君はページェントが終わってもずっとA君でしょ。そのA君を神さまはステキなA君に成長させてくださるんだよ!」と。愛をこめて語る先生の言葉のすべてをA君は納得できたわけではなかったようですが、先週のページェントでA君はいただいた役を立派に演じていました。そこには一つの危機を乗り越えて神さまに成長させていただいたA君の姿がありました。ページェントでは一人ひとりが大切な役をいただきます。どの役もイエスさまの誕生を紹介する大切な役であり、子どもたちは神さまからいただいた役に一生懸命に取り組みます。

私たちは今年のクリスマス、主イエスを紹介するどんな役をいただいているでしょうか。もしかしたら自分が望んでいたのとは違う役回りだとしても、神からいただいた働きであるならば、心込めて神さまにささげるつもりで担っていきたいと思います。

さて、ルカ2章には最初のクリスマスに飼い葉桶の中に生まれた赤ん坊を見つけた羊飼いたちが紹介されていますが、彼らの姿に教えられるのは、聞いたことをすぐに行動に移している点です。天使たちが去っていくと彼らはすぐに「さあ、ベツレヘムへ行こう」と話し合い、「急いで」出かけ、そして飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を「探し当てた」のでした。また彼らは「この幼子について天使が話して

くれたことを人々に知らせた」とあるように、ミニ天使というか、伝道者の役割をも果たしています。羊飼いたちにとって神の喜びの知らせは自分たちのところで止めてはいけない、周りの人たちと分かち合うべきものだったのです。当時、羊飼いの仕事は多くの人々からは「卑しい仕事」と見なされていましたから、村の人々に知らせることは勇気のいることだっただろうと想像します。しかも羊飼いたちが語った内容は、天使たちと出会ったことのない人々にとっては「理解しがたい、まゆつば物の話」だったはずで、「お前、気でも狂ったのか？」と言われかねない話だと思うのですが、しかし羊飼いたちはひるむことなく人々に語ったのでした。それほどまでに、このとき羊飼いたちが受けとった喜びは大きなものだったのです。

その大きな喜びとは、主なる神の愛の確かさを知ることができた喜びでしょう。主なる神は、町の人々から軽蔑を受けながら野原で暮らす自分たちのことを、愛をもってしっかり覚えて一緒に歩んでくれていることがはっきり知らされた故の喜びでした。「神、共にいませり」。これまで話には聞いていても、「神はほんとうに私たちと共にいてくださるのだろうか？」と疑いを向けざるを得ない日々を過ごしてきた。その彼らが「神さまは俺たちに愛を注ぎ、一緒に歩んでくださっているし」を確かに受け取ることができたのが、最初のクリスマスだったのです。

ベトザタの池で38年間病気に苦しんでいた男が、主イエスと出会い、立ち上がって歩き出した話を想います（ヨハネ5章）。この男は池のほとりにずっと「横たわって」きました。この男と主イエスとの会話から垣間見るのは、この男が人生をどこかあきらめてしまい投げやりになっている姿です。「誰も俺のことを助けてなんかくれない。みんな自分のことばかり」。主イエスからの問いに答える一言に、38年の長い間、この男が心の中にためてきた恨みつらみが噴き出します。そのように心の中におりのようなものがたくさんたまって、素直さを失い、ねじれを抱えているこの男のことを、それでもまっすぐに見つめ、彼が背負っている重荷を「我がこと」として受けてくれる主イエスのまなざしと出会ったとき、この男は神に向かう賛美と共に立ち上がり、それまで寝ていた床を担いで、自分の足で歩きだすのです。それはイエス・キリストの「喜びのともし火」に照らされた新しい歩みの始まりでした。何年前かに「この世界の片隅に」という題名の映画がありましたが、人々の目から見たら「片隅」であったとしても、その「片隅」は主なる神が愛のまなざしを注ぎ、苦悩と悲しみを一緒に受けながら歩んでくださる「真ん中」です。イエス・キリストは、世界中の「片隅」に生きる一人ひとりに「喜びのともし火」を届けるために来てくださいました。それは暗闇の中も嵐の中でも消えることのない「ともし火」です。「羊飼いたちは見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」（20節）。飼い葉桶の救い主の「ともし火」に照らされて、私たちが賛美を携えて出かけていきましょう。